

歴史的な転換期となった2009年が終わりを、新たな世界の構築に胸躍る2010年が始まった。その巻頭言を飾る峯浦一喜先生の「扉」に描かれた「近未来」には、脳神経外科医療の将来を託す若き医師達への重厚な想いが込められている。「変わることこそ変わらないこと」、そしてその変化の契機となる偶然あるいは必然的な巡り合わせの数々の実証を己の経験を交えて解説されている。脳神経外科の26年後は果たしてどのような世界を醸し出しているのか、初夢は宇宙を巡り、一筋の光明を手掛かりに新天地を目指す。まさに開拓者の心境である。

今回は年頭を飾るに相応しい力作揃いである。石川正恒先生の「特発性正常圧水頭症」は、「暗黒の30年」を乗り越え、新境地を開拓したその先駆者の一途な想いの込められた大作である。地道な努力を重ね、ようやく確立した診断法とその治療法、そしてそれを裏付けるための医師主導型臨床治験（SINPHONI）で得られた数々の成果を淡々と記すその内容の奥深さは読者を圧倒する。吉田一成先生の「舌下神経シュワン細胞腫の手術戦略」は、永年頭蓋底外科手術に携わってきた熟練者ならではの術中写真、解剖図譜と診断画像およびそのイラストなどをふんだんに取り入れた、豊富な経験を活かしての手術手技解説である。泉本修先生の脳神経外科疾患治療のスタンダードとしての「下垂体腺腫の治療：最近の話題」は、豊富な自らの経験と膨大な資料からポイントを要領よく纏められており、現在のGH-, PRL-, ACTH-producing adenomaや、非機能性腺腫の診断基準や近年の薬物療法を中心とした治療方法および注意点が大変わかりやすく解説されている。研究報告としては、内頸動脈閉塞に伴う致死的な急速広範囲脳腫脹に対して、この80%にも及ぶmortalityからいかに救命するか、まさに脳神経外科救急最前線報告が、山崎貴明先生から報告されている。また、同じ救急現場から頻繁に遭遇する小児頭部外傷では、病歴や神経学的所見が取り難い中で、いかに重篤な損傷を見逃さないようにするかを3D-CT画像を駆使して検討した報告が松本佳久先生よりされている。症例報告では、血管内治療に関連して発生した偶発的合併症の報告、極めて特異な進展や経過を呈した脳腫瘍の報告など、日常の診療で遭遇したらすぐにでも役立つような情報を筆者らが自らの体験をもとに豊富な文献から要点をまとめて考察を展開しており、読み応え満点である。このような学問的に濃い内容に触れて、われわれ脳神経外科医は、あたかもお年玉をもらった子供のように、知識の新たな充填に満足気になっていると、突然、最終章の「コラム：医事法の扉」で脳神経外科の医療現場で起こる現実の世界に引き戻されてしまうのである。

さて、今年は脳神経外科医にとってどんな1年となるのか、初夢と現実の狭間で乞うご期待である。